

ドブネズミです。美しさの秘訣ですか？ やはり「人にやさしく」、これに尽きるのではないのでしょうか。私も人といっしょに心理学研究を始めて随分と長くなりますが、良い研究の背景にはいつも、人への思いやりがあったように思うのです。

例えばですね、友だちがNTTのナカシマさんら(2015)と共同研究をしているのですが、ある日実験室にきたら、左の部屋に痛がってる同胞の写真、右側の部屋には普段の写真が貼ってあったそうです。これは左側の部屋を避けて欲しいってことなんだと、彼、すぐ察したそうです。わかったよナカシマさん。君の成功はラボの成功、つまりは僕らの成功なのだから、喜んで協力しよう。

彼としては、ネズミが同胞の表情を見分けるなんて当たり前すぎやしないかと少々心配でもあったそうですが、サルエンスー(訳注: Science誌のこと)の記事にも取り上げられるなど、杞憂だったようです。猿マニアの雑誌でネズミがやってやったぜって自慢されました。いい話ですよ。

私ら関学サトウ・グループ(2015)の話もしまししょうか。どうしたことでしょう、ある日のこと、実験室に来たら同僚が水の張られたプールに落ちていたのです。あれあれと思っていたらサトウ先生、プールの隣に私を置いたんです。ピン!と来ましたね。私が助ければいいんですね、先生! 先生の成功はラボの成功、日本そして世界の心理学の成功でもある。同僚だっけずっと水に浸かっているのは嫌でしょう。喜んでお手伝いいたします! 自慢ではありませんが、この研究のおかげでテレビにも出させていただきまして、悪い気はしないですね。先生がいつの間にか一部始終を録画していたのは、ちょっとショックでしたけど(笑)

ただ人と付き合っていると、もう少しはっきりして欲しい時もあります。先ほどの研究でも、同僚がいるプールとは反対側に食べ物

置いてあることがあり、先生が何を求めておいでなのか、かなり悩みました。結局、誇り高きドブネズミ一族の末裔として同僚を助けることを優先しましたが、いやしくも研究に携わる者として、自らの誇りを優先し、先生のお考えを汲み取る努力を放棄したことが正しかったのか、自問せずにはいられません。え、先生的にも良かった? それは何よりです。

シカゴ大学のバートルら(Bartal et al, 2014)の苦労話も業界では有名です。ワナにはまった同僚を助ける研究で、最初は同じ家系で同室の同僚がワナにはまっていて、それは普通に助けますよねネズミ的に。すると次は、初対面だけど同じ家系の同僚がワナにはまっています、家系が一緒だから助けるのが正解でしょうか? 次は同室だけど家系が違う同僚がワナにはまっている。むむ、助けますか。そしたらそう、初対面で家系も違うネズミが出てきた。さすがにこれは助けられないのが正解なのでしょうか? 終いには、同室の同僚の家系(でも自分とは違う家系)の、初対面のネズミが出てきたそうです。かなり悩ましいですよ。シカゴの面々、助けることは助けたが、果たしてあれが先生の求める正解だったのか、今でも分からないと嘆いていました。

貴方は美しくなりたいそうですね。それなら少し考えてみてください。見た目の美しさは、所詮、同じ種の中でしか通用しないでしょう。一方、今日紹介させていただいた、ネズミから人へのやさしさは、貴方にも伝わったのではないのでしょうか。種を超えてドブネズミにも伝わる、写真には写らない美しさを、貴方には手に入れて欲しいと思います。



Profile — 平石 界

東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学。東京大学、京都大学、安田女子大学を経て、2015年4月より現職。博士(学術)。専門は進化心理学。